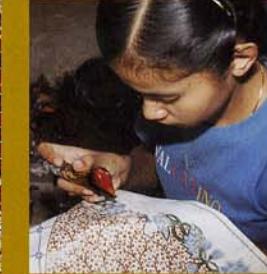
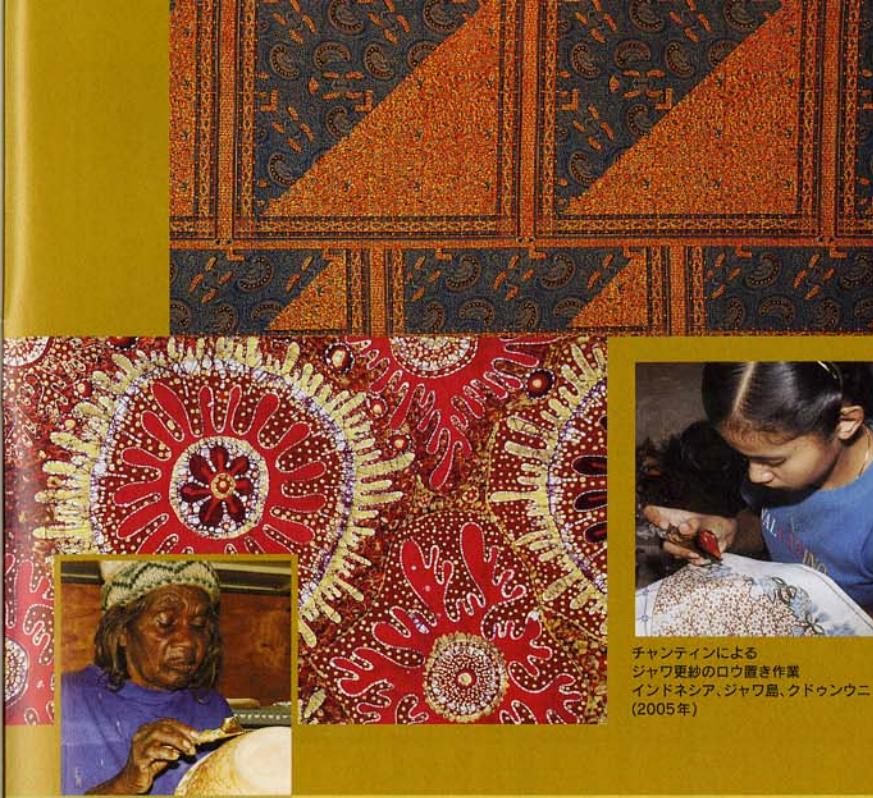


更紗今昔物語 —ジャワから世界へ—



チャンティンによる
ジャワ更紗のロウ置き作業
インドネシア、ジャワ島、クドゥンウニ
(2005年)



九月七日からはじまる特別展
「更紗今昔物語—ジャワから世界へ」では、グローバル化の
うねりのなかでダイナミックに変貌を続けるジャワ更紗の
デザインと技術、その拡がりを紹介する。

吉本 忍
(よしもと しのぶ)

本館民族文化研究部



ロウケツ染めの衣装をまとった娘
カリブ海のセントルシア、首都カストリーズ
(2006年)

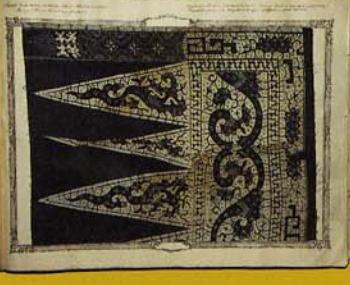
ジャワ更紗

大小一万数千の島々からなるインドネシアでは、多くの島々で今なお多種多様な伝統的染織技法が継承されている。それらのうちでもおもにジャワ島を中心としてつくられてきたロウケツ染めの布は、インドネシアを代表する染織品として世界的有名であり、わが国では一般にジャワ更紗の名で知られている。ジャワ更紗のロウケツ染め(ロウ防染)技法は、ジャワ語やインンドネシア語ではパティック(patic)とよばれており、今日、その名前は「ロウケツ染め」を意味する国際共通語として、広く世界で使われている。なお「更紗」の語はかつてインドネシア語では「ロウケツ」(ロークツ)とよばれており、その語義は、当初は「南蛮貿易」あるいはその後の紅毛貿易によって舶載された異国の模様染めの布であつたと見られるが、本稿、並びに今回の特別展では「模様染めの布」という意味で使っている。

ジャワ更紗は、ジャワ島の宮廷を中心として発展を遂げたと見られる染織品で、腰巻、肩掛け、頭巾などをはじめとする伝統的な衣装として用いられてきた。



ジャワ更紗をまとったジャワ人の一家
インドネシア、ジャワ島、ジョグジャカルタ(1929年)



1850年から70年ごろに
スイスで生産された
ジャワ島向けの
プリント更紗サンプル
ブヴィエ・コレクション

ジャワ更紗にあらわされてきた模様は、はじにさまざままで、あたかも万華鏡をのぞき見ているような錯覚さえもおぼえさせるほどものである。そうした更紗模様のうちには、古代から現代に至るまでの長い年月のあいだにジャワ島に残されておらず、現存するジャワ更紗についても、その多くは一九世紀以降につくられたものと見られる。したがって、それ以前のジャワ更紗についてはつきりしたことはわかつていない。ただし、文献史料としては、一六三三年ごろにあらわされたジャワ島の年代記「バハット・スンカラ」があり、この年代記に「バティックの腰布」を意味する語句がしるされていることから、一七世紀前半にはすでにジャワ更紗が存在していたことは間違いないと考えられている。

ジャワ更紗の布素材としては、おもに木綿が使用されており、ロウケツ染めの工程では、手描き用のチャヤンティンや型押し用のチャップとよばれる鋼板製の道具を使つて布面にロウ置きがおこなわれてきた。また、そうしたジャワ更紗のロウ置きは、布の両面からおこなわれおり、ロウ置きを終えた布は、染液のなかに布をくぐらせて染められる。したがつて、染めあがつたジャワ更紗はいわゆる両面染めの布であり、布の表裏はほとんど同じ状態に染めあがる。

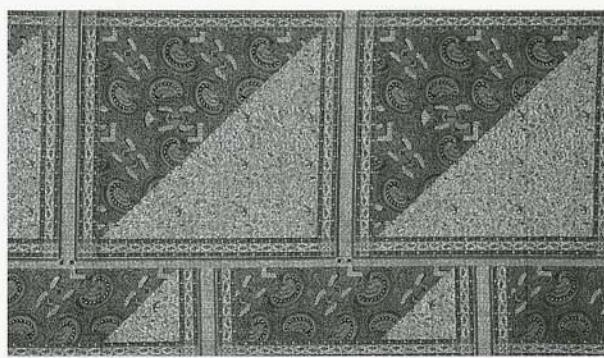
ジャワ更紗にあらわされてきた模様は、はじにさまざままで、あたかも万華鏡をのぞき見ているような錯覚さえもおぼえさせるほどものである。そうした更紗模様のうちには、古代から現代に至るまでの長い年月のあいだにジャワ島に残されておらず、現存するジャワ更紗についても、その多くは一九世紀以降につくられたものと見られる。したがって、それ以前のジャワ更紗についてはつきりしたことはわかつていない。ただし、文献史料としては、一六三三年ごろにあらわされたジャワ島の年代記「バハット・スンカラ」があり、この年代記に「バティックの腰布」を意味する語句がしるされていることから、一七世紀前半にはすでにジャワ更紗が存在していたことは間違いないと考えられている。

ジャワ更紗の布素材としては、おもに古典様式の更紗は、中部ジャワ様式やジャワ北岸様式の更紗よりも古いと考えられる。この古典様式の「青い更紗」で、それらの藍で染められた更紗は、おもに幾何学的な模様や草花模様によって構成されている。それらの模様によつて反映している。それらの模様によつて構成されているジャワ更紗のデザイン様式は、古典様式、中部ジャワ様式、ジン様式、古典様式、中部ジャワ様式、ジ

ヤフ北岸様式に大別することができる。古典様式の更紗は、中部ジャワ様式やジャワ北岸様式の更紗よりも古いと考えられる。この古典様式の「青い更紗」で、それらの藍で染められた更紗は、おもに幾何学的な模様や草花模様によつて構成されている。この古典様式の「青い更紗」については、わが国で一七八一(安永一〇)年に刊行された「増補華布便覧」や一七八五年に刊行された「更紗図譜」

に白描の図像があらわされている。また、中部ジャワ様式の更紗はジョグジャカルタやソロの宮廷を中心としてつくれてきたもので、ヒンドゥー・ジャワ時代やそれ以前にさかのぼる古くからの伝統的な模様を茶褐色系のソガ染料と藍で染めた「ソガ染めの更紗」、あるいは、合成染料によってその色調を模倣した更紗が大多数を占めている。さらに、ジャワ北岸様式の更紗は、ジャワ島北岸の港町を中心として発展を遂げたもので、アラブ、中国、ヨーロッパ、日本などから藍、茜、ソガなどの植物染料や合成染料の影響による国際色豊かな模様が氾濫している。

以上に述べてきた伝統的なジャワ更紗については、本館では一九九三年の特別展「ジャワ更紗—その多様な伝統の世界—」で展示しており、一九八〇年代以降にひらくれてきた絹のジャワ更紗を当時本館の向かいにあつた国立国際美術館で「現代のジャワ更紗—ニユーファッションへの展開」として展示してきた。そして、今回の特別展「更紗今昔物語—ジャワから世界へ—」では、一九世纪から二〇世紀にかけてつくられた伝統的なジャワ更紗を特別展示館一階の冒頭で紹介する。



ジャワ更紗を
デザイン・ソース
としたオランダ、
フリスコ社製の
アフリカ向け
プリント更紗
(2000年)

シコク、セイロンなどに向ても輸出されるようになつていった。

そして、二〇世紀においては、一九〇年代から一九五〇年代にかけての第二次世界大戦前後の時期に日本からもジャワ島に向けて同様のプリント更紗

の輸出がおこなわれていた。また、一九七〇年代以降には、インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイなどでも、ジャワ更紗を模倣したプリント更紗の生産がはじまっている。

それらのプリント更紗は、その流通の初期段階から安価であることが庶民にとって最大の魅力であった。したがつて、一九世纪初頭にはじまったプリント更紗のジャワ更紗の市場への流入は、ジャワ更紗の業界をしばしば圧迫してきた。そして、一九九〇年代半ばごろからは、プリント更紗がついにジャワ更紗の市場を席巻するほどになつており、伝統的なジャワ更紗の需要は急速に減少し、庶民の多くはロウケツ染めのジャワ更紗にかえてジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗を日常の、あるいは儀礼用の衣装として着用する傾向がいちじるしく増大している。また、そうしたプリント更紗市場の急速な拡大傾向はインドネシア国外においても顕著であり、タイ、マレーシア、シンガポール、ラオス、ミャンマー、カンボジア、さらにはナバールなどの国々の女性たちのあいだでも、それぞれの民族のものと継承されてきた伝統的な腰布にかえて、ジャワ更紗を模倣したプリント更紗を日常用あるいはおしゃれ着用の腰布、その他の衣装として着用する傾向が、とりわけ一九七〇年代以降増大の

一途をたどつている。

一方、ヨーロッパのプリント更紗は、一九世紀中頃にはアフリカへも輸出が始まっている。そうしたなかで、ジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗は、ジャワ島向けのものとは異なるものではあつたが、一九世纪末から二〇世紀初頭頃には東アフリカに向けても輸出されていた。また、西アフリカに向けたプリント更紗がおそらくとも二〇世紀初頭から輸出されてきた。それらのデザ

インもまた、ジャワ島向けや東アフリカ向けのものとは異なるものであつたが、西アフリカにおいては、その後もジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗が主要なデザインとしてもてはやされ、現代においても、ジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗が大量に出まわっている。なお、西アフリカ向けのプリント更紗には、二〇世紀初頭からロウケツ染め技法が取り入れられており、ロ

紗が主要なデザインとしてもてはやされ、現代においても、ジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗が大量に出まわっている。なかで、日本アフリカ向けのプリント更紗が最も多く主要な商品として現在に至つている。

東アフリカや西アフリカ向けのプリント更紗市場には、二〇世紀前半にインドや日本も参入している。そして二〇世纪後半には、アフリカの国々においても

プリント更紗の生産がはじまつておらず、プリント更紗をはじめ、携帯電話

ジャワ更紗を模倣したプリント更紗

ヨーロッパでは、一七世紀にインド更紗の染色技法が導入され、本格的なプリント産業が勃興する。そして、産業革命のなかで木綿布の大量生産がはじまり、一八一一年から一八一五年のあいだには、

ジャワ島やマレー半島の織品をプリント(捺染)技法によって模倣したイギリス産の模様染めの布、すなわち「プリント更紗」が、ジャワ島に輸入されている。このことはイギリスの統治下にあつたジャワ島に副総督として赴任していたトマス・ラッフルズが、彼の有名な著作『ジャワ史』(一八一七年刊)に記載している。

同書では、さらにそのときのプリント更紗の染色堅牢度(色落ちや色汚染に対する強さ)が劣悪であつたことから、初回の販売は好評であつたものの、その後の販売が思わしいものでなかつたことも指摘している。

しかし、そうした染色堅牢度の問題も次第に克服され、それでも、おそくとも一八四〇年代以降には、オランダ、イギリス、スイスをはじめとするヨーロッパ諸国からジャワ更紗を模倣したプリント更紗が大量にジャワ島、さらには、スマトラ島、シンガポール、ラングーン(現ヤンゴン)、サイゴン(現ホーチミン)、バ

プリント更紗の衣装をまとった娘たち
マリ、パマコ(2005年)



プリント更紗の衣装をまとった男たち
ガーナ、アクラ(2005年)

さらにはインドネシア、タイ、中国なども加わつて、熾烈な市場獲得競争が繰り広げられてきた。そうしたなかで、ヨーロッパでアフリカ向けのプリント更紗を生産してきた企業の多くは、二〇世紀後半に撤退を余儀なくされた。今なおヨーロッパでアフリカ向けのプリント更紗を生産しているのは、一八四六年に創業のオランダのフリスコ社と、一八一二年に創設され、一九〇八年から西アフリカ向けのプリント更紗の生産を開始したABCワックス社の二社のみとなつていている。また、日本のアフリカ向けプリント更紗の生産は、一九八〇年代に終息している。その一方で、二〇世紀後半からは中国と印度で生産されたプリント更紗が大量にアフリカに向けて輸出されようになつていている。こうしたなかについて、中国のアフリカ向けのプリント産業は急速に勢力を拡大しており、アフリカのプリント更紗の工場や前記のイギリスの老舗として知られるABCワックス社をも傘下におさめて、今日、その勢いはどどまるところを知らないといつたありさまである。

今回の特別展では、現代アフリカ、および東南アジアで流通しているプリント更紗が展示資料の中核となる。それらのうちには、ジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗をはじめ、携帯電話

や扇風機などをはじめとした身近にある生活用品などをデザイナーソースとした、われわれの意表をつくキッズユナデザインのプリント更紗、アフリカの伝統文化に根ざしたデザインのプリント更紗などがある。それらを特別展示館一階に布のまま、あるいは衣服として仕立てられた状態で大量に展示する。また、そのほかには、一八四〇年から一九三〇年までのあいだにおもにスイスで生産された

生活用品などをデザイナーソースとした、われわれの意表をつくキッズユナデザインのプリント更紗、アフリカの伝統文化に根ざしたデザインのプリント更紗などがある。それらを特別展示館一階に布のまま、あるいは衣服として仕立てられた状態で大量に展示する。また、そのほかには、一八四〇年から一九三〇年までのあいだにおもにスイスで生産さ

世界に展開する口ウケツ染めの技術

ジャワ更紗の染色技法である口ウケツ染めは、すでに述べているようにチャヤンティンやチャップとよばれる銅板製の道具を使って布の両面に口ウケツをおこなつてきた防染技法である。今日、口ウケツ染めとしたロウケツ染めは、世界各地でおこなわれて、その多くが、本来インドネシアのジャワ語でジャワ更紗のロウケツ染めを意味する名称であったバティックの名でよばれている。そうしたバティックとよばれる世界各地のロウケツ染めのすべてが、ジャワ更紗の影響によるものとはいえないものの、マレーシア、タイ、ミャンマー、日本、オーストラリア、カリブ海諸国、アメリカ、ヨーロッパなどで、二〇世紀にあきらかにジャワ更紗の

影響によっておこなわれるようになった。ロウケツ染めが見い出される。ただし、それらのロウケツ染めは、いずれも布の片面のみロウケツをおこなつており、ジャワ更紗のように布の両面にロウケツをするという例は確認されていない。

マレーシアのロウケツ染めは、二〇世紀初頭にはじまっており、マレー半島東部のクランタンとトレングヌが、中心的な生産地となっている。ロウケツ染めにはジャワ更紗と同様にチャヤンティンやチャップを使用している。当初、ロウケツ染めの布は、ジャワ更紗と同様の腰巻や筒型スカートなどの衣装として用いるための布素材として生産され、それらの模様もジャワ更紗を模倣したものであつたが、

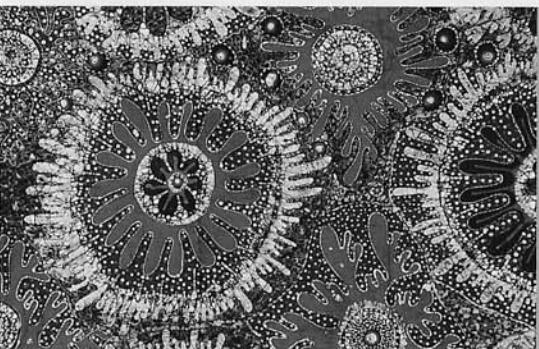
日本でのロウケツ染めは、明治時代の末ごろに、京都高等工芸学校（現京都工芸織維大学）校長となった鶴巻鶴一がジャワ更紗の技法を導入してはじめており、京友禅の染色技法のひとつとして

けのプリント更紗、東アフリカ向けのプリント更紗、西アフリカ向けのプリント更紗などの実物資料やサンブル帳も展示する。これらの歴史的なプリント更紗の資料は、昨年末にスイスで発見した、他に類例を見ない貴重なもので、今回の特別展において世界ではじめて公開されるものである。

れた、ジャワ島をはじめとするアジア向のプリント更紗、東アフリカ向けのプリント更紗、西アフリカ向けのプリント更紗などの実物資料やサンブル帳も展示する。これらの歴史的なプリント更紗の資料は、昨年末にスイスで発見した、他に類例を見ない貴重なもので、今回の特別展において世界ではじめて公開されるものである。



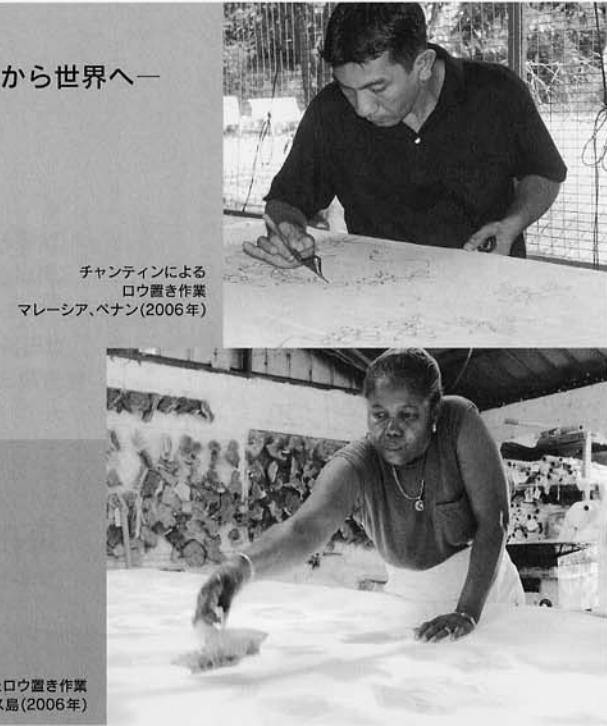
ジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗をまとった女性たち
カンボジア、シェムリアップ（2006年）



オーストラリアのアボリジニのロウケツ染め



特集 更紗今昔物語 —ジャワから世界へ—



チャンティンによるロウ置き作業
マレーシア、ペナン（2006年）

型を使ったロウ置き作業
パラマ、アンドロス島（2006年）

今に至っている。伝統工芸や現代工芸の分野においては、数多くの作家も輩出している。ただし、今日日本でおこなわれているロウケツ染めのロウ置きにはおもに筆が使用されており、チャヤンティンやチャップの使用例は一般的ではない。なお、ジャワ島では日本からの発注によつて、第二次世界大戦前から断続的におもにキモノ用のジャワ更紗の生産もおこなわれている。

オーストラリアでは、一九七〇年代ごろから、アボリジニの女性のあいだで、ジャワ更紗の技術を導入したチャヤンティンによるロウケツ染めがおこなわれている。ただし、点描を主体としたその模様は、アボリジニ独自のもので、その作品は彼らのあらたなアート＆クラフトとして展開している。また、最近では陶器の絵付けをするさいに、素焼きの土器にチャヤンティンを使用してロウ置きをし、その後に釉薬をかけて焼成するという、新機軸の陶器づくりもおこなわれている。

カリブ海諸国では、一九七〇年代以降に、ほとんどすべての国々で、ロウケツ染めがはじまっている。大半の国々では、欧米人によってジャワ更紗のロウケツ染めがはじまっている。大半の国々では、歐米人の衣装や壁飾りなどの製品がつくられている。ロウ置きには、セントルシアでは、当初、チャヤンティンやチャップが使用さ

れていたが、今日ではおもに筆が使われている。また、ハーバードではスパンジを素材とした独特の型押し用のロウ置き道具が考案されている。なお、スリナムでは産業としてのロウケツ染めはおこなわれていないが、ジャワ島からの移民の三世で洋画家として有名なスキ・イロデクロモによって、チャヤンティンや刷毛を使用したバティック・ペインティングの作品が創作されている。

ヨーロッパやアメリカでは、産業としてのロウケツ染めは見い出せないが、チャヤンティンを使用したロウケツ染めワーカーが各地でしばしば開催されている。そのほかに、バティック・アーティストとして作家活動をしている例が少なからず見い出される。

今回の特別展では、以上に述べてきたジャワ更紗の影響によるロウケツ染めの技術に関する資料として、マレーシア、タイ、ミャンマー、オーストラリア、カリブ海諸国、日本などのロウケツ染めの布を、チャヤンティンを使用して絵付けをおこなったオーストラリアのアボリジニの陶器、チャヤンティンと型押し道具などとともに特別展示館二階に展示する。また、同階では、これらとともに、チャヤンティンやチャップをはじめとするジャワ更紗の制作工程や製作用具についても展示する。

今日においては、観光工芸品として多様な製品が生産されている。

タイのロウケツ染めは、一九七〇年代にマレーシアを介して導入されており、ブーケットやチャーンマイを中心として、おもに観光工芸用の衣装や壁飾りなどをはじめとする製品としてつくられている。

そして、バンコクの美術大学やチエンマイ近郊の身障者用の職業訓練校などでは、ロウ置き道具として用いられているチャーンティンのほかに、型押し用の木版ブロウツやインド更紗のロウ置き道具であるカラム・ベンも一部で使われている。

ミャンマーのロウケツ染めは、一九九〇年代ごろにはじまっており、首都のヤンゴンとその周辺には、「あまりの小規模の工房がある。それらの工房では、木のブロウツに銅板を埋め込んだ型押し用の道具を使って、ジャワ更紗のデザインを模倣したロウケツ染めの更紗がつくらされている。それらの製品は女性用のロンジーをはじめとする衣装として用いられている。

日本のロウケツ染めは、明治時代の末ごろに、京都高等工芸学校（現京都工芸織維大学）校長となった鶴巻鶴一がジャワ更紗の技法を導入してはじめており、京友禅の染色技法のひとつとして